

# 授業評価アンケート分析結果のフィードバックによる授業改善の効果分析

松本 幸正<sup>1)</sup>・近藤 啓子<sup>2)</sup>

1)名城大学理工学部建設システム工学科, 2)名城大学大学教育開発センター

## 1. はじめに

名城大学では、授業に対する学生の総合満足度を高めることを目的とし、平成14年度後期より、学生による授業評価の結果を、CS分析に基づく名城大学独自方式により分析している。分析では改善すべき点が定量化され、結果は担当者にフィードバックされている。

本研究では、分析結果のフィードバックが授業改善にもたらした効果を捉えるため、同じ授業科目の分析結果を前年度と比較し、満足度の変化や影響要因などについて分析する。

## 2. 授業評価分析結果のフィードバックと分析対象科目

名城大学では、FD活動の一環として、平成12年度から「学生による授業評価アンケート」が、全学で実施されている。本研究ではこのうち、平成15年度後期と平成14年度後期に実施された2回分のアンケート結果を用いて分析する。

担当者にフィードバックされる授業評価アンケートの分析結果には、基本的な集計結果、「総合満足指標」、評価項目ごとの「改善要求度」などが含まれ、わかりやすいようにグラフ表示されると共に、言語による改善ポイントの表現も行われている。ただしこれは、学生からの評価が低い科目の授業改善が促進されるよう意図されたフィードバックである。

「総合満足指標」は、授業に対する学生の総合的な満足度を表す値であり、総合的な評価項目に対する回答割合から算出される値である。「改善要求度」は、例えば「授業では、学習意欲や興味が増すように工夫されていた」といった評価項目ごとに算出される値で、その項目に対する学生の不満度および総合満足の評価との関連の大きさに比例し、値が大きいほど学生からの改善の要求が高いことになる。「改善要求度」の高い項目に対する不満の割合を減少させることで、「総合満足指標」の値を向上させることができる。

分析結果のフィードバックが授業改善に及ぼす効果を捉えるため、両年度で同様に開講された科目を抽出した。抽出された時間割別の科目数は953科目となった。

## 3. 「総合満足指標」の変化

### (1) 科目ごとの「総合満足指標」の変化

科目ごとの「総合満足指標」の1年間の変化を見るため、横軸に平成14年度の結果、縦軸に両年度の差をとったものが図1である。この図から、平成14年度に評価が低かった科目ほど授業改善が大きいという傾向が見て取れる。分析結果のフィードバックは、ねらい通り、評価の低かった科目に対して、授業改善の効果をもたらしたと判断できる。

### (2) 要因別の「総合満足指標」の変化

1年間の変化に影響を及ぼした科目の要因を明らかにするため、要因別に「総合満足指標」の平均値を算出し、多重比較により有意性を検定した。要因は、職、年齢、回答人数、学部、前年度「総合満足指標」である。このうち有意で大きな差となった年齢と前年度「総合満足指標」の2つの要因を取り上げ、それらの要因別に平成15年度「総合満足指標」の平均値を算出した結果が図2である。この図から、年齢が低いほど、前年度の評価が低かった科目ほど、授業改善が進んだことがわかる。

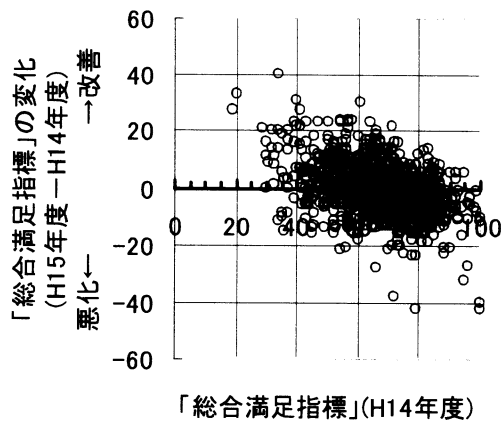


図1 「総合満足指標」の変化

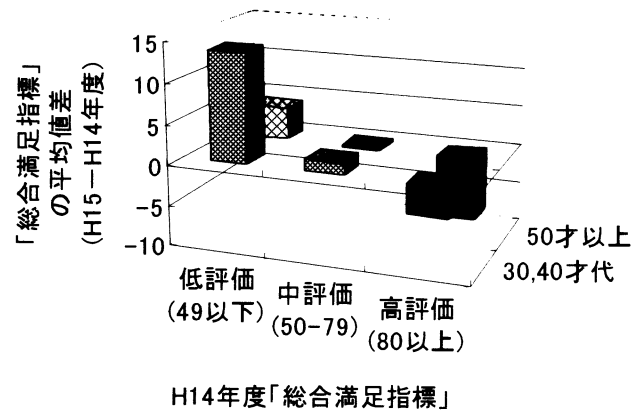


図2 層別の「総合満足指標」の変化

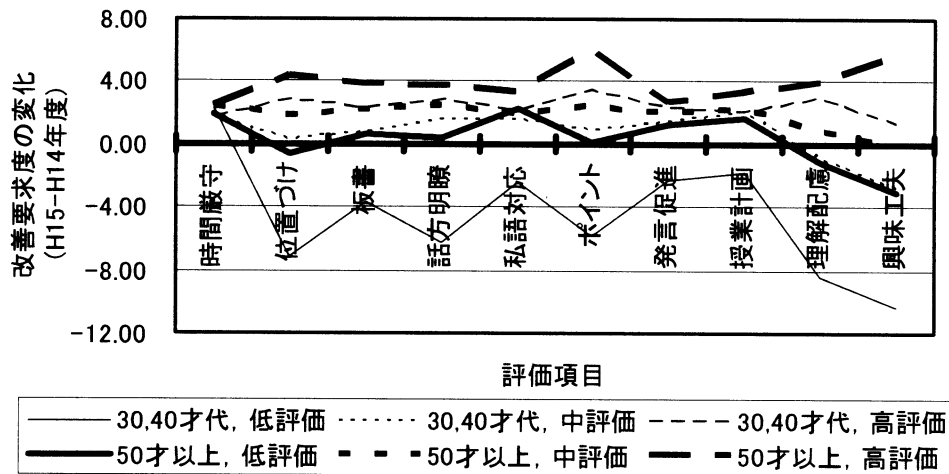


図3 層別の改善要求度の変化

### (3) 層別の「改善要求度」の変化

図3は、年齢および前年度「総合満足指標」の2つの要因によって区分した層ごとに算出した項目別の「改善要求度」の変化を示している。この図から、30、40才代の低評価層では全体に改善要求度が減少し、特に「興味工夫」や「理解配慮」の「改善要求度」が大きく減少していることがわかる。一方、50才以上の高評価層では全体に「改善要求度」が増加しており、特に、「興味工夫」、「ポイント」での値が大きくなっていることがわかる。

### 4. 具体的な改善策の例

30、40才代の低評価層に属する科目を対象に、具体的にどのような授業改善が行われたのかを聞き取り調査した。総合満足指標が20以上向上した科目に共通した改善点として、学生の理解度の配慮が挙げられる。具体的には、授業の中ごろの10分～15分を用いて、教科書を見たり友達と相談したりしながら解く課題を出し、理解度が低かった部分については説明を補足するなどである。これらの科目担当者は、学生が主体的に考えて学ぶようになったと述べており、実際、学生の自己評価による勉学意欲も大きく向上していた。

### 5. おわりに

本研究では、授業評価アンケートの分析結果のフィードバックが授業改善にどのような効果をもたらしたかを分析した。その結果、学生からの評価が低かった科目に対する効果が大きいことがわかった。今後は、学生の満足感の中身を詳細に分析すると共に、次なるフェーズとして、授業による教育効果を計量できる新たな指標の開発を目指したい。